

## 人権保育専門講座8（連続講座③）

「ともに考え合うことを通して深めよう

～各園における人権保育を推進するために～

テーマ：「ジェンダーについて考える」

常磐会短期大学 教授 ト田 真一郎 さん

家庭支援推進保育士の方を中心とした連続講座の3回目は、「ジェンダーについて考える」がテーマでした。

2015年4月に文部科学省から「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について」という文書が出されました。文科省が2013年度に初めて実施した全国調査によると、全国に606人の性同一性障害の児童・生徒が在籍していることも明らかになっています。

しかし、報告されている数値は当事者の一部であると考えられており、国内においては人口の約7.6%（13人のうち約1人）のセクシュアルマイノリティの人がいるという調査もあります。このことから多様な性のあり方について教職員が学ぶことの必要性も高まっているといえます。

そこで、今回の講座では、元保育士で、セクシュアルマイノリティの子どもたちの居場所づくりに取り組まれている「にじいろi-Ru」の田中一歩さん、近藤孝子さんをゲストスピーカーとしてお招きし、セクシュアルマイノリティの当事者として、また、保育士としての経験のなかで感じてこられたことなどについてお話いただきました。そして、そのお話をもとに、どの子どもありのままの自分を語れる、受けとめ合えるなかまづくり、居場所づくりの大切さなどについてグループで感想や課題を出し合い、明日からできる取組について考えました。



セクシュアルマイノリティの当事者の方のお話を直接聞く機会が今までなかった参加者が多く、身近な問題として考え合える良い機会となりました。



## 田中一步さんお話から ～講演記録～

### 1. 自分の生き立ち～それを支えてきた部落解放運動～

僕は、1975年に生まれました。今、ちょうど40歳です。僕が助産師で取りあげられたときには「女の子ですよ」と言われて生まれてきました。僕にとっては、その瞬間から女の子として生きる道が始まったのではないかなと思っています。それと同時に両親にとっても女の子として僕のことを育てる日々が始まった瞬間でもあります。

僕の両親は兵庫県のそれぞれ別の被差別部落に生まれ育ちました。いろいろな生き立ちのなかで自分の生まれ育った場所を否定して生きてきた母と、そんな差別はおかしいと思いながら育った父との間に僕は生まれました。

父の家族は、差別のなかで生き、すごく貧乏で、6人きょうだいのなかで父しか学校へ行っていないという状況です。ですから、父方の親戚には、文字が書けない人がいました。だから、僕の家には、父のきょうだいがいかなる書類を書いてほしいとよく来ていて、そのことが子ども心にとっても不思議でした。のちのち、学習していくなかで、なぜ、自分のおじさん、おばさんたちが字を書くことができなかったのかを知っていくことになりました。

そんな父と母が部落解放運動のなかで出会って、僕と弟の2人が生まれました。僕は家のなかでは長女として、お姉さんとして育てられました。僕が生まれ育った頃の部落解放運動というのは、親や地域が学校の先生たちに部落差別をなくしていきたいという思いを、「子どもたちへのわかる授業」や「部落差別のおかしさを正しく子どもたちが学ぶ教育内容」を要求していくことで伝えたり、僕たち子どもに、差別に負けない力をつけるための学習会をしたりして、学校に対しても行政に対しても解放運動そのものが盛んであった時代でした。だから、僕の両親は毎日のように仕事が終わってすごく疲れているのに、ごはんをばーっと食べて、夜遅くまで集会に出かけていくというのが続いていました。僕は、子どもですから、寂しい気もちもあつたけれども、僕の両親は、集会から帰ってくると、「どんな話を聞いてきたか」「どうして両親が夜遅くに疲れていても集会に行くのか」という話を僕たちきょうだいにしてきていたので、寂しい気もちと同じくらいに、両親のがんばっている姿から留守番をがんばろうという気もちになっていました。

母から聞いた話のなかで、今でも良く覚えている話があります。小学校の低学年のころのことです。集会から帰ってきた後、いつもどおり僕の前に母が座りました。そのとき、母は「今日は結婚差別に遭って命を絶ってしまった女性の話を聞いてきた」と話してくれました。その話をしながら、母は涙を流していました。僕は、母親



が泣く姿っていうのをあまり見たことがなかったので、「なんで泣いてるんやろ？」と思ったんです。それで、「なんで泣いてるの？」と聞いたら、母にとってその当時は、僕は「娘」ですから、「そのお姉さんとあんたが重なって涙が出てきたんや」と言いました。そして、部落差別によって命を絶ってしまった女性のことを詳しく話してくれました。その時、僕は、「わたしは、そのお姉さんみたいに死なないよ」「わたしは大丈夫やで」と答えました。母の話聞いて「おかしいやん」と子どもながらに思えたんです。「なんで同じ人間やのに、ただそこに生まれたというだけで好きな人と結婚ができないの？」「そんなことで周りから反対されるなんておかしい」というのが低学年であった僕のなかにもしっかりとありました。だから、そのときの母親の話を今でも覚えているし、そのころから、自分の育ったムラに対して卑下しない、部落差別はおかしいと言える自分になっていたことを覚えています。

## 2. だれにも言えない秘密

僕は家で親の姿をみて部落差別はおかしいと思いながら育ちましたし、僕が行っていた学校では、年4回人権について学習する節目の日がありました。その学習では、僕たちムラの子どもたちはクラスで自分の生い立ちを語ってアピール文を読んだり、クラスの子どもたちも自分の生活を語ったり、伝え合ったりして仲間づくりをしていました。僕はそのなかで自分の立場や思っていることを友だちにも言えましたし、大切な仲間もできていました。家では学校の友だちのことを話すこともできました。さらに、学校、解放児童館の先生たち、加配の先生たちなど、いろいろなおとなに囲まれて育ち、たくさんのおとなに愛されていることも感じていました。

でも、そんな僕でしたが、人には言えない3つの秘密がありました。

その秘密の1つ目として、自分は女の子として生まれているのに、自分にはない「おちんちん」があると想像しながら自分の部屋で生活をしているという秘密です。2つ目の秘密が、その当時キャプテン翼という漫画がはやっていたのですが、自分の部屋では両親がつけてくれた「えりこ」という名前ではなく「つばさ」という名前で生活していたこと。3つ目は、女の子が好きなことでした。

この3つのことは、愛してくれている親やきょうだい、友だち、学校の先生や児童館の先生に、絶対に言えない僕の秘密でした。それは、初めにも言いましたが、生まれた瞬間から僕は家のなかでは長女として、お姉ちゃんとして、そして保育所・小学校では「女の子」として生きてきて、「女の子として生まれたら女の子として育つのが当たり前だ」と自分自身でも思っていたので、その秘密をもっている僕が「おかしい」と思っていたからです。「女の子なのに、おちんちんがほしい僕なんて絶対おかしい」「女の子なのに、えりこという名前ではなく男の子としての名前で生活したいと思うのはおかしい」「女の子なのに、女の子が好きなのはやっぱりおかしい」と思いながら生活をしていました。

そして、僕は、「部屋のなかの自分」と「部屋を出てからの自分」という2つのスイッチを切り替えその秘密を守って生活をしていました。そういう生活を小学校の高学年から、今となりにいるパートナーの近藤さんと出会うまで続けていました。スイッチを切り替えることは僕にとってはそんなにたいへんなことではありませんでした。たいへんだというよりも、無意識のうちに自分を守っていて、おかしいところを人にみせないように、おかしいと言われたくないという思いで生活してきたのだと思います。

## 3. 自分のセクシュアリティについて

### (1) 小学校時代

自分がおかしいのではないかというのを感じ始めたのは小学校5年生くらいでした。僕の通っていた小学校

の5・6年生のクラスでは休み時間に野球をするのがはやっていました。いわゆる男の子が野球をして、それを女の子が応援をするのが日常でした。そのなかで、僕を含め、女子の名簿に名前が入っている子の3人は応援ではなく、男の子たちと一緒に野球をしていました。それは、僕自身が野球が好きだったし、みるより、する方が好きで、自分の楽しみでしていることもあったのです。でも、もう一つ僕には別の喜びがあったんです。男の子に混じって野球をしていると女の子が「キャーキャー」と応援してくれます。自分も男の子と同じように「キャーキャー」言って応援をしてもらえる感覚を味わう、男の子として自分のことをみてほしい、みてもらえているという喜びです。もちろん、そんなことは人には言えませんでした。野球が好きなボーイッシュな女の子としてクラスのなかで存在していたと思います。そして、その頃から「自分はおかしい」「絶対にこのことは人には言えない」と思うようになっていきました。

ボーイッシュな女の子というイメージは地域のなかでも思われていました。僕が好きな服装はズボンやジャージでした。僕が好む服装や言葉づかいなどで両親も「あんた女の子やのに」と言ったことはありませんでした。母と服を買いに行っても僕が選ぶ服に対して、母が「この服、あかん」と言うことはありませんでした。でも、僕が好きじゃないスカートを選ぶと、すごく嬉しそうに喜ぶ姿があり、女の子の好む服を着てほしいと母は思っているということを子どもなりに感じていました。ですから、卒業式や入学式などの行事の時には母が喜ぶ服を選んで着ていました。毎日の日常生活のなかで言葉として言われてはいいけれども、知らないうちに「女の子としてはこれをしなくてはいけない」「女の子だからこう生きなければならない」という積み重ねが僕のなかにあったと思います。

## (2) 中学校時代

中学校に入ると制服があります。制服を着ることを嫌だと言ってもいいということ自体、考えたこともなかったもので、当たり前のように決められた制服を着ていました。今のようになんかいろいろな情報がなかったので、「男の子として生きたい」という感覚を自覚したり、言葉として発したりすることはまったくありませんでした。自分のことを完全におかしいと思うだけで、だれかに相談することもありませんでした。ですから、僕はいわゆるほかの女の子と同じように女の子として中学生生活を送りました。

そんな僕でしたが、「男の子としてみられたいと思っていたんやな」というできごとがあります。中学2年生の時の水着の販売でのことです。体操服を着ている僕が業者のところへ友だちと一緒に水着を買いに行きました。「2年〇組の田中です。M サイズください」と言いました。そしたら、業者の人が男性の水着を渡してくれたのです。そのとき僕は男の子に間違えられたことを心のなかで「やったー」とめっちゃくちゃ嬉しかったのですが、隣にいた友だちには「ちょっと、これ、どう思う？」「私、女やで」「なんやねん」って言ったんです。頭のなかで思っている本当の気持ちをわざと逆の言葉で友だちに伝えて、自分がおかしいと思われぬような方法をとったのです。そして、さらに、家に帰って同じように「こんなことがあって、どう思う？」と母に言うこともしました。自分の本当の気持ちや思っていることに蓋をして蓋をして生きてきたのだなと思います。

## (3) 高校時代

高校の制服はセーラー服でした。今、僕は高校生活の3年間を思い出そうとしてもほとんど思い出せないんです。僕の高校時代を知っている人は、「高校時代はこんな子やった」といろいろな話をしてくれると思うのですが、僕自身はあまり覚えていないのです。それは、今の僕じゃない僕を生きていたので、忘れてしまっているのではないかと思います。思い出そうとしても思い出せないのです。「自分と違う人」「自分のセクシュアリティ

ィをかくして生きる」ということは、「別の人を生きる」くらい大きなことなのかもしれません。

覚えていることと言えば、僕には「とてもすてきな友だちがいた」ということです。僕は部落解放運動のなかで育ってきたので、「部落差別はおかしい」ということは伝えることができる生徒でした。高校ではそういうクラスづくりはまったくなかったのですが、個人的に自分が大切だと思える友だちには立場を伝えることができました。

もうひとつ覚えていることのなかに、「好きでもない男の子に告白をした」ということがあります。それは、友だちどうしの会話のなかで「好きな子だれ？」みたいな会話がたくさんあって、僕は女の子がずっと好きだったのですけれども、もちろんそれは言えなくて、好きでもない男の子をひとりつけて告白するということをしました。僕のなかでは自分自身のことをおかしいと思っていたので、そういうことをしたら「普通の女の子」になれるのではないかと思ってとった行動でした。

自分のことをおかしい人だと思い込みながら高校3年間を過ごしましたが、部落問題にかかわっては、自分の立場のことをきちんと受けとめてくれる友だちや先生もいました。ですから、逆に短大に入学してから、「あそこはこわい地域だ」「それはどこ？」という会話があたり、被差別部落の地名を聞いたり、「部落だからこわい」「親が言っていたから」というような会話があたりしときに、とても衝撃を受けました。もちろん、そんなことを言った相手に対しては、「それはおかしいよ」と伝えてきましたが、短大でのできごとから、親が教えたことは子どもは当たり前のこととして、事実であるかのように受けとめていくのだなと痛感しました。

僕は、小さな時から正しいことにきちんと出会うことはすごく大切なことだと思っていたので、そんなところからも保育士になりたいという気持ちがずっとありました。その気持ちを高校の先生に相談し、保育士の免許がとれる短大へ進学し、卒業後は保育士になりました。もちろん、その時にも自分のセクシュアリティを誰にも言っていないし、女性として就職をしました。

#### (4) 保育士になってから

保育士になって就職したのが豊中にある保育所でした。その職場の最初の職員会議で、自分の立場(出身)について話をしました。その会議の議題は「ひなまつりについて」という内容でした。自分の立場のことを話さないと今後も自分の思いを何も伝えられないと思ったからです。誰がどう思うかではなくて、「私の考えはこういうところからきています」と言うなかで、自分の考えを話したいと思ったのです。今はその保育所を離れてだいぶ時間もたっていますので、今の職員会議がどのようにもたれているのかはわからないのですが、その当時は「子どもの集団づくり」「親の集団づくり」「職員の集団づくり」という3つの大きなテーマできっちりと話し合っていくということを大切にしていました。

僕は子どものいろんな姿から出発して、あそびや取組をつくっていこうと思い実践していました。そのなかの誕生会の取組の話をします。保育所全体としても「誕生会」は毎月ありましたが、クラス単位でも取り組みました。僕のクラスだけでなく、どのクラスも、スタイルは色々でしたが、その子が生まれたその日に誕生会をするということをやっていました。24人の子どもがいたら、1年に24回の誕生会があるという取組です。

誕生会の取組をとおして、一人ひとりが愛され、大切にされていることを伝えたいと思ったのです。親は、毎日毎日、子どもを保育所に預けて仕事をし、必死で急いで迎えに来ています。忙しいなかで子育てしているので、我が子をとてもかわいいと思っていても伝えられないという姿もありました。誕生会の取組をとおして、我が子が生まれてきたときの気持ちを親自身にも振り返ってもらいたいという思いから、親と一緒に誕生を祝う誕生会の取組をしていました。

誕生会の取組のなかで、ある子どもが3月生まれの僕の誕生会をしてあげると言ってくれました。「先生も親に手紙を書いてもらっておいで」と言うので、「ありがとう。そうするわ」と言って親にメッセージを書いてもらって3月2日の僕の誕生日に子どもたちと一緒に僕の誕生会をしました。僕も母に、5歳の子どもたちにわかるように僕が生まれたときの気持ちを手紙に書いてと頼みました。その時に母が書いた文章があるので読んでみます。

『初めての子ですごく嬉しかった。嬉しい気持ちと同時にこれから先、この子が部落差別を受けるかもしれないと思うと、責任を感じました。私はおにいちゃんとおとうとの3人きょうだいで育ちました。女きょうだいがほしかった。だから、女の子が生まれてとても嬉しかった。一緒に買い物に行ったりしたいなと思った』

母の手紙には、「部落差別」という言葉が書いてあったので、子どもたちはすぐに「部落差別ってなに？」って聞いてきました。ですから、僕なりの説明を子どもたちにわかるようにしました。子どもたちは僕の説明を聞いて、単純に「そんなん変やん」「そんなんおかしいと思う」と言いました。僕も「おかしいやろ？」「でも、そんなことがほんまにあるから、そんなことで傷ついてほしくないなって、先生のお母さんは思ったんやって」という話をしたのを覚えています。そして、手紙の後半の「女きょうだいがほしかった」「女の子が生まれてとても嬉しかった」という部分はスルーして、誕生日の歌を歌って終わりました。僕は子どもたちに親からとても大切にされているということが伝えたくて取組んだ誕生会だったのですが、僕への手紙の後半の「女きょうだいがほしかった」「女の子だったからすごく嬉しかった」と書いてある母の手紙をみて、「僕は僕を生きていけないのだ」と、結果として感じてしまうできごととなってしまいました。

振り返ってみると保育所から小学校、中学校、高校、短大、そして勤めてからも「女の子として生まれたから女の子として生きる」「外性器が女の子だから女の子として育つ」「女の子として男の子を好きになるのが当たり前」というのを365日、24時間、ずうっと刷り込まれながら僕は生きてきたのだなと思っています。

## (5) 近藤さんとの出会い

その保育所に4年ほど勤めた頃に、近藤さん(以下:彼女)が異動してきました。それまでも研修会などでは顔見知りで、色々な取組を報告し合ってきたのですが、同じ保育所で勤めるのは初めてでした。

当時の保育所には子どもを大切にすてきな先生がたくさんいましたが、僕がすごく覚えているのは彼女の保育で子どもが大きく変わっていくことでした。4月当初は自己主張がとても激しく、そのことで周りから決めつけられて拒否されてしまっている子どもや、もじもじして自分を表現できない子が、運動会や発表会の行事や日常生活をとおして、自分に自信をつけていくなど、どの子も自分を大切に、仲間関係も自分たちでつくっていけるような集団になっていく、担任がいなくても行事ができるくらいのクラスになっていくようすをみて、すごいなと思いました。そして、同時に、「この人、すてきやな」と思いました。そして、その気持ちを彼女に伝えたいと思いました。そして、彼女に「あなたのことがすごく好き」「あなたの保育がいいなと思っている」ということを単純に伝えました。僕が不思議だと思うのが、24年間誰にも言えなかった僕の秘密についてもそのときに、自然に言っていました。「小さいときからこんなことを思っていた」とか、5年生の運動場での話など今まで誰にも言えなかったことを伝えました。

僕の話聞いて、まず彼女は「しんどかったんやな」と言ってくれました。そして、具体的に色々なできごとがあったときに「そのとき、どんなふうに思ってたん？」と一つひとつ丁寧に尋ねてくれました。そして、僕の話

の最後に、「今、いちばんしたいことは何？」と聞いてくれました。僕は自分でもそんなことを言うとは思っていませんでした。でも、「男性物の下着を身に着きたい」と言ったんですね。今でも「なんであんなこと言ったのかな」と思うのですけれども、心の奥底ですっと思っていたことだったのだと思います。そうしたら、彼女は「明日、買いに行こう」と言ってくれて、次の日に初めて男性物の下着を二人で買いに行きました。

その日から、僕には、「自分がおかしくて誰にも言えない」と思っていたことを何の否定もせず、僕のしたかったことを一つひとつ丁寧に聞いて「やってみよう」と言ってくれる人ができました。僕には今まで、自分をどう呼称するかということに歴史があって、「私→うち→自分」ときて、ずっと「自分」と呼んでいたんです。でも彼女と出会ったことで、彼女の前では「俺」とか「僕」と言えるようになりました。下着も男性物の下着を身に着けるようになりました。今まではダンスのなかに着たい服はあるけれども、同時に着たくない女性ものの服も入っていました。でも、彼女と一緒に暮らすようになってからは、ダンスのなかには自分の着たい服しか入っていない状態になりました。そのことがすごく嬉しいことでした。好きな言葉で話し、好きな服を着て、自分の身に着きたい下着を身に着けて、好きな人に好きと言えることがこんなにも幸せを感じることもなんだと実感しました。24年間のしんどかった生活を忘れるくらい、この人に出会えてよかったと単純に思いました。

すると、別の問題がおこってきました。自分を出せる場所がひとつできたことによって、自分が自分でいられない場所がしんどくなっていったのです。まず、自分を隠して演じるのが当たり前だった保育所がしんどくなっていきました。

そんなときに、「3年B組金八先生」というドラマをみて、いわゆる「性同一性障害」という言葉を初めて知りました。ドラマのなかで上戸彩さん演じる鶴本直という生徒が「僕は女じゃない、男だ」と訴えたセリフを聞いてものすごい衝撃を受けました。それまで、そういう言葉も、そういう人が僕以外にもいるということをまったく知らなかったからです。彼女に受けとめてもらって、「ひとりじゃない」と感じる事ができたところに、「僕みたいな人もいる」というのを知ったのです。それが今から16年くらい前です。そして、その同時期に競艇選手で女性として登録していた人が男性として登録したいという記者会見をニュースでたまたまみました。僕にとっては「自分はおかしくないのだ」「自分以外にもそういう人はいるのだ」「ひとりぼっちではないのだ」と感じられるようになっていきました。そして、僕みたいな人たちのことをもっと知りたい、「性同一性障害」について知りたい、「性とは何か」と2人で調べる日々が始まっていきました。

## (6) 友だちへのカミングアウト

多様な性があるということを知り、彼女の前では100%ありのままの自分でいられたのですが、僕の家族や大好きな友だちの前ではずっと自分らしく生きられない日々が続いていました。それでも今までにくらべたら幸せでした。自分でいられる場所がないときよりは幸せでした。その反面、苦しみも感じるようになっていきました。それと同時に、自分たちの大切な友だちには2人の関係も、僕自身のことも伝えたいと思うようになっていきました。

僕は部落解放運動のなかでともに育った、今でも仲の良い友だちがいます。中学ではソフトボール部のキャプテンを僕がつとめ、その友だちが副キャプテンという間柄で、何でも話せる友だちでした。高校は別の高校へ行ったのですが、それぞれの学校で自分が部落出身であることをなかなか言えないことや、偏見の強いなかで悩んだことなどをムラに帰って話し合える唯一の友だち、大事なことはなんでも話せる友だちでした。その友だちに好きな彼ができたときも、自分の出身をどう伝えるかということも相談し合いました。その友だちは、彼にカミングアウトし、その後、結婚をしました。

あるときに、その夫婦も含め、地域の仲間と結婚差別についての劇をすることになりました。約10年前のことです。劇をするときには配役を決めなければなりません。お母さん役、お父さん役、先生役、結婚差別の当事者の役などを決めるのですが、そのときは、男子と女子に別れて配役を決めることになりました。その時、僕は彼女と出会っていましたし、自分のことをしっかりと男の人として生きたいと思っているときだったので、お母さん役や当事者の女の子の役はやりたくありませんでした。でも、そんな大切な仲間のなかでも、その気もちを言うことができませんでした。その時は、役を取らず、音響の係をしました。みんな仕事も忙しいなか、毎晩集まって劇の練習をしたのですが、役がある人は台詞も覚えないういけませんから、とてもたいへんです。僕はたいへんなので断ったのではないし、本当は一緒に演じたいという気もちがありながら、やれない理由が言えず悶々としていました。

ある日の練習の帰りに、大好きな友だち夫婦に「大事な話がある」と言って僕がずっとかかえていた秘密と彼女との関係のことを話すことにしました。僕は部落差別のこととか、部落出身であるということと言うときに緊張することはありましたが、同じムラに生まれ、部落問題を一緒に考えてきた仲間に自分のことをカミングアウトするというのは、さらに緊張しました。大切な友だちに「もし、否定されたらどうしよう」という僕のドキドキと「僕の友だちだから絶対にそんなことは言わない」という気もちで30分くらい何も言えず、「あのな・・・」「あのな・・・」とくり返すばかりでした。そんな僕の姿をみて2人は「ええで、今日でなくても」「聞いてほしいことがあるならいつでもいいよ」と言ってくれましたが、「いや、今日、聞いてほしい」「ちょっと、待って」と言ってやっと言うことができました。長い時間をかけて聞いてもらいました。

僕は女としてしか生きられないと思いついて入っていたしんどい時期には、スカートをはき、髪を長くしていました。友だちはそのときの僕のことを思い出して、「化粧して、髪の毛伸ばしだした姿をみて、私はやっと女らしくなってきたな、って喜んでた。でも、その時がいちばんしんどかったんやな」と泣きながら言ってくれました。たったそれだけだったけれども、改めて自分のしんどいことをわかってくれる友だちだなと感じられました。また、友だちは僕たちのことを「同性愛やと思っていた」「女の子どうして好きなのだ」と思っていたと話してくれました。そして、友だちはそんな性のありようがあることを以前から知っていたとも話してくれました。これからはしんどいことあるやろな・・・などなど、朝までその時は語り明かしました。そのときは、彼女の前だけ自分を100%出せていたのが次は2人増えたことが嬉しくて自転車で帰り道に「また明日も2人に会いたい」と言ったことを今でもおぼえています。

僕が僕でいられる場所ができるのにすごく時間がかかっています。彼女と出会ったのが16年前、2人の友だちに話したのが10年前。ですから、2人だけで過ごす時間が6年くらいあって、それからやっと2人増えました。でも、その後も両親にも、きょうだいにも言えない日々が続きました。そんな僕を、友だち夫婦は誰にも言わず、見守ってくれました。それから、段階を経て、きょうだいに、そして、親に僕たちのことを伝えていきました。

#### 4. ふりかえってみると...

僕は、部落問題に関して小さいときから「おかしい」と思って育ってきました。ですから、差別を目の前で受けたとしたら、泣くかもしれないし、逃げるかもしれないし、誰かに話を聞いてもらうかもしれないし、それはわからないけれども、でも「おかしい」と思っているのだから、絶対に差別には負けたりしないという気もちがあります。そして、部落差別はおかしいと人に伝える力も小さい頃からついているし、支えてくれる仲間もいます。

なのに、セクシュアリティのことに関してはなかなか強くなれませんでした。きょうだいや親に話すのにもすごく時間がかかりました。時間がかかっただけでなく、彼女に受け入れてもらったのにもかかわらず、僕が僕自身



を受け入れられない時期が長くありました。ふりかえてみると、やっぱり、人に自分のことを話すのがこわかったんだと思います。否定されたくないし、こわくて、こわくて、ある時期、家から外へも出られなかったしんどい時期もありました。まわりの人が僕のことを「へんだと思うのではないか」「おかしいと思うのではないか」という思いがどうしてもぬぐえませんでした。こんなに受けとめてくれる彼女や友だちがいるのに、そこから脱出できない苦しい時期がありました。

僕は、早く受け入れたい、早く楽になりたい、という焦りもありましたし、しんどさから脱出したいという気持ちがあったのですが、そんなとき、友だちの夫婦は「24年間、1人で秘密をかかえて自分を否定し続けて、そんな簡単に自分を受け入れられるなんて、無理やろう」と言ってくれました。「もし、しんどかったら逃げたらいいし、自分が生きやすい方法で生きたらいい」と言ってくれました。

ムラのなかでは女の子ですつといた僕は、大好きなムラのなかへ帰るのもしんどくて、早くムラの人たちに自分のことを受け入れてほしいという気持ちも大きかったのですが、僕自身が自分を受け入れるのにかなり時間がかかりました。自己否定をする時間が長ければ長いほど、自分を肯定するには時間がかかるのだなと思っています。しかし、今にいたるまでの間に、僕以外のいろいろな性の人に会う機会もたくさんあり、そのなかで自分らしく生きている人にも出会い、僕は僕を受け入れられるようになりました。だからこそ、まわりの人にも、長い時間をかけて多様な性のことを知ってもらったり、知りたいと思ってもらったりすることで、多様な性を理解してもらえるようになるのだと思うようになりました。



## 近藤孝子さんお話から

### ～セクシュアリティについて考えてみよう～

17年前に一步(以下:彼)に出会って、一緒に生活するようになり、「セクシュアリティって何なのか」ということについていろいろな人の話を聞いたり、本を読んだり、テレビをみたりしてきました。私たち2人にとってセクシュアリティのことは、ひとときも切り離せない話でした。当然、私や彼だけでなく、ここで今日集まって話を聞いている一人ひとりにとって、セクシュアリティは大切な自分のものです。でも、自分のセクシュアリティについてしんどさを感じない人にとってはあまり考えることもなく、普通に当たり前生きていけるのだなと感じています。

みなさんは、「自分の性別は何ですか？」と尋ねられたら、どう答えますか？きっとほとんどの人がすぐに答えられるし、きっと隣に座っている人も答えられるだろうと思っています。私も聞かれたら「女です」と答えます。でも、「なぜ、女なのですか？」と問われたら、立ちどまってしまいます。彼のように女として生まれてきて男だと思っている人もいるので、何をもって女なのだろう、男なのだろうと考えると、わからなくなります。

そこで、人の性を4つの要素からみてみたいと思います。

1つは「身体の性」です。それはいわゆる生物学的性で性染色体とか外性器・内性器の状態、ホルモンなどの要素で決められる性です。赤ちゃんがおぎゃーと生まれたときに「男の子です」「女の子です」などとすぐに性別を言われることが多いと思いますが、なかには、性分化疾患といって、性器などで身体では性別が決められない人がいます。

2つ目が「心の性」です。これは、身体の性とは関係のないところで、ジェンダーアイデンティティと言います。

「自分自身が何者か」「私は女です」などのように、自分が何者かということをもどのように思っているのかということ。これは、私みたいに「女です」という人もいれば、「男です」という人もいれば、「自分の性がわからない」という人もいれば、「男と女と両方あるような感じがする」という人もいれば、「昨日は男だけど、今日になったら女の感じがする」という人もいます。

3つ目が「社会的な性」です。保育所などでは、すごくかかわりの多いことだと思うのですが、「男らしさ」「女らしさ」だとか、自分がどんな服を着たいとか、社会のなかでどんな役割で生きていきたいのか、といったような「ジェンダー」という性別役割としての「性」のことです。

これが自分のなかにある3つの性の要素です。私のセクシュアリティで言うと、「身体の性」も「心の性」も「社会的な性」も女であることに違和感はないですし、多くの人はこの3つが一致していて当たり前だと思っているのだと思います。でも、そんななかで、「身体の性」がはっきりわからない人がいたり、「身体の性」と「心の性」に違和感をおぼえる人とか、心の性別が男でも女でもない人などがいたりするということを考えると性は「男」か「女」だけではないなと思います。

そして4つ目の「好きになる性」です。性的な対象としてどういう人が好きかということです。同性が好きな人もいれば、異性が好きな人がいれば、同性も異性も両方好きな人がいれば、好きな対象がいない人もいれば、性別にかかわらず好きな対象がいるという人もいます。

いわゆる「当たり前」とされている性が実は違うのだということを知っていないと一人ひとりが自分自身を生きられないし、「身体の性」で男の子、女の子に分けてはいけないと思っています。私も、保育所の実践のなかで、一人ひとりを大切にする保育をしてきたつもりでした。でも、ふり返ってみると、そのときに、「男の子の〇〇くんは〇〇くんそのままがいいよ」「女の子の〇〇ちゃんは〇〇ちゃんそのままがいいよ」と言って、同和保育をしてきたように思います。「男の子の〇〇くん」ではなく、「〇〇くんのありのままがいい」ということを根っこにした取組でなければ、一人ひとりの人権を本当に守るということにはならないのではないかとと思っています。

さらに、「性的マイノリティ」と言われること自体が変わってほしいと願っています。それは、ここに参加している一人ひとりの性は50人いたら50通りの性のあり方があるからです。当たりの性があるなかには性的マイノリティがあるのではなく、多様な性のあるなかには一人ひとりの性のあり方があるととらえると、一人ひとりが本当の自分を生きられるのではないかなと思います。ですから、多様な性を知ることが大切なのです。

性自認や性指向は生まれもったもので、それにいつ気づくかの違いだけで、教育やしつけのなかでは変わりません。自分とは違う性のあり方の人を否定してはいけないし、人の性別を見た目で勝手に決めてはいけないし、決められません。性別は自分で決める、自分も持っているものだとすることを大切にしたいと思います。

セクシュアリティの子どもたちの居場所づくり にじいる+Ru (アイル)  
<http://nijiru-ru.jimdo.com/>

### セクシュアリティ (性のあり方) の4つの要素

#### ① 身体の性

性染色体、外性器・内性器の状態、ホルモンなどの要素によって決められる性。

#### ② 心の性

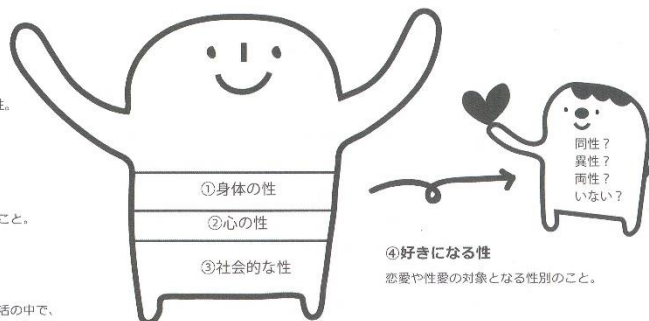
自分自身の性をどうとらえているかということ。

#### ③ 社会的な性

身体の性に関わりなく、成長過程・社会生活の中で、後天的に身につけていく性のこと。  
・性別役割 (期待される役割「男らしさ」「女らしさ」)  
・性別表現 (服装や見た目・ふるまい)

#### ④ 好きになる性

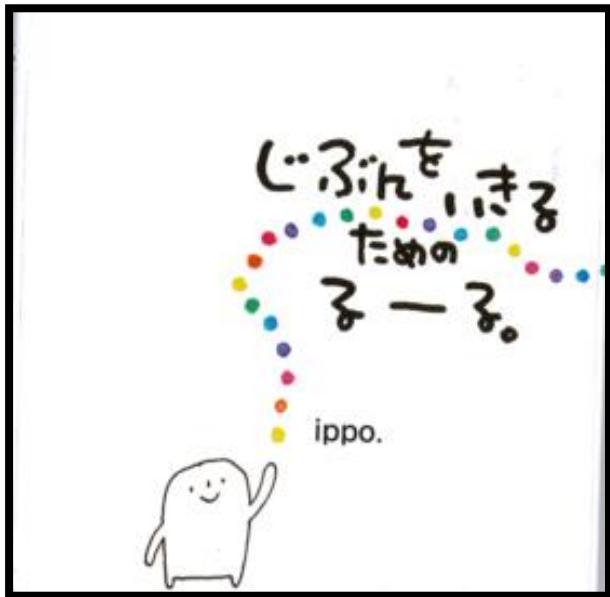
恋愛や性愛の対象となる性別のこと。



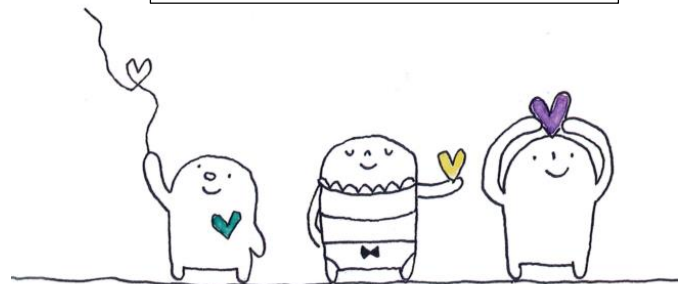
#### 性のあり方は多様

- ・心の性 (性自認) 好きになる性 (性的指向) は、教育やしつけで変わらない
- ・性別の認識がない人もいる
- ・違いを否定しないこと、どんな性もOK!
- ・見た目ですぐに決めない (見た目では、わからない)

## 絵本「じぶんをいきるためのるーる」の紹介



「じぶんをいきるためのるーる」  
解放出版社 800円＋税



じぶんが

とってもとっても  
たいせつな 6つのるーる



きたいふくをきる

一歩さんが自分らしく生きるためにどんなことを大切にしていきたいかを6つのるーるとしてまとめた絵本。  
たったこれだけ。でも、一歩さんにとって、自分らしく生きるためにとても大切なるーる。

あなたには、あなたらしく生きるためにどんなるーるが大切ですか？



文科省から「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について」という文書が2015年4月に出了。その子一人ひとりの思いをきいて、その子一人ひとりにあつた支援をするというのは、当たり前のことです。

それだけでなく、まわりの問題、みんなの問題として、とらえることが大切です。セクシュアリティはその子だけが知るものではありません。すべての人が多様な性について知っていくことが本当に大切だと思っています。

僕は、当事者との出会いがなかつたし、多様な性を生きて良いという言葉にも出合えなかつたので、僕のような当事者の子どもたちには知ってほしいと思い、「じぶんを生きるための一冊。」という本をつくりました。

この絵本をつくるのに 2 年半くらいかかりました。できあがつたときに、絵本に記した、たった6つのルールを僕はできなかつたんだと思いました。たった6つのことなのですが、このことはどれも生活に密着していることなんです。生活に密着しているということは、ほとんどの人がふつうにできていることでもあるのです。でも、僕のようにできていない人もいます。

この6つは「僕」が「自分を生きるためのルール」なので、「一緒だな」と思う人もいると思いますが、「ちょっとちがうな」と思う人もいると思います。人の数だけ生きるためのルールがあつていいと思うし、あるのではないかと思っています。

僕がかつて好きになつた子も果たして女の子だったのか・・・とこの本をつくりながらふり返つて考えました。そして、僕は教室のなかでいつも一人ぼっちで自分だけがおかしいと思つて悩んできたけれども、きっと僕のまわりにもそんな人はいたのだろうなと思つました。僕がひとりぼっちだと思つていたときに、隣の子もそう思つていたかもしれないし、僕が勝手に男の子だと思つていた子が女の子だったかもしれない。それは、保育所でも幼稚園でも一緒なのではないかと思っています。

僕も保育士をしてきたので、多様な性を考えると、たくさんの変えていかなければならないことがあつたと思います。でも、おとなでも100%すべてのことを知っているわけではありません。気づいたり、知つたりしたときに、少しずつ変えていく、それをすることがすべての子どもの人権を守っていくことにつながると思つます。みなさんと共に少しずつ変えていけたらいいなと思っています。





保育所では、4月の最初の顔合わせの時に、この1年どんなことを大切に保育をしていくのかという話し合いをしたいと思います。そのときに、彼は自分のことを「被差別部落出身である」と語りました。私を含め何人かは異動したばかりの初対面で、どのような価値観をもっているのかわからないのに、その人たちの前で自分のことを語る彼をみて、「自分にそんなことができるのだろうか」「すごいな」と思いました。

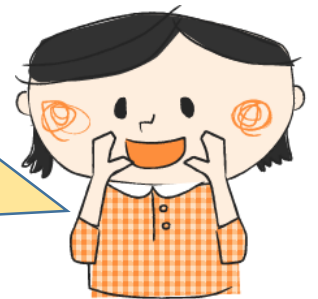
部落問題に関しては胸を張って堂々とみんなに伝え、それはおかしいと言うときにも、怒るだけでなく、きっちり話をしていける力が彼にはあります。彼のことを「解放運動のなかで力をつけて育ってきた子」というイメージで、私も含め、周りにいる者も、ムラの人たちも思っていましたし、そして、彼自身も自覚していたことでした。

でも、自分のセクシュアリティのことになると、こんなにも、というくらい怯えていました。私自身は、部落差別の問題も、セクシュアリティの問題も、周りがかわっていかなくてはならないという面で一緒だなと思っていました。でも、そんなふうに考えられない彼がいました。差別する人がおかしいのではなく、自分が変だという思いが強い彼でした。それは、生まれたときから、きつい言葉で「あなたは女」と言われなかったとしても、保育所の生活、学校での友だち、出会うおとなのなかですり込まれてきたからです。彼は自分を押し込め、自分が変だという気持ちが強く、いくら私たちが大丈夫だからと言っても前を向けないでいました。

そう考えると、セクシュアリティを押しつけたり決めつけたりしない保育が大切だと思います。

身近なあそびのなかなど、気づいたことを1つずつ検証していったら、今からでもたくさんできることがあるのではないかと思います。取り組んでいくなかで気づきもたくさんあるのではないかと思います。これからもみなさんと一緒に考えていきたいと思っています。

田中一步さん、近藤孝子さんのお話を聞いた後、気づいたことやわかったこと、そして、今からでもすぐに行える保育についてグループで考え合いました。



### 【グループワークで出された意見や課題】

- ジェンダーについての話し合いは職場でもするが、セクシュアリティについては話し合いをすることがなかった。職場にもちかえりたい。
- 多様な性があること、多様な性として一人ひとりを大事にしていかなければと痛感した。
- 保育士自身が何気なく発した言葉や行動で、つらい思いをしている子がいるかもしれないと思った。
- 自分の価値観があたり前だと思って、知らず知らずに押しつけていたかもしれない。
- 子ども一人ひとりに安心できる居場所が保障できてい



るだろうか・・・。

- 一人ひとりを大切と言っているのに、自分の「あたり前」を保育のなかで子どもにあてはめてしまっているかもしれない。
- 「セクシュアルマイノリティの子がいるかもしれない」という意識で子どもたちに接することが大切。
- メディアなどでとりあげられていても、どこか人ごとになってしまっていた。
- 保育士の意識改革が必要。「男の子」「女の子」でわけることでつらい子がいることに気づけるか。

## 【みんなで蒔いた種】～明日からの一歩～

- 普段の生活や保育のなかで、「男女」でわけていることってないか？どうしたら一人ひとりが安心して過ごせるか？園内研のなかで話し合っていきます。
- 自分のなかにある性について、みつめてみる。性別にとらわれず、一人ひとりをありのまま受け入れられるうつつわを身につけたい。
- いろんな人、いろんな生き方があって“あたり前”とみんなが思える世の中にできるように、自分が伝えていけることは何なのかを考えていきたい。
- 子どもたち一人ひとりの「その子らしさ」「自分らしさ」を大切にしたい。
- 自分のなかにもまだまだ外見、身体の性で決めつけたり、分けたりしている部分がある。「人の性は勝手に決めつけてはいけない」ということを忘れず、一人の人として大切にしていくことを意識し、周りの職員とも気づきあっていきたい。
- 性について、職員間や親の会でしっかり議論し、自分のなかにある性について確認し合っていきたい。



## ～ト田先生の話より～

今日、お二人からお話を聞かせてもらって、部落問題と向き合うときの一歩さんの姿が、セクシュアリティにかかわってきたときの一歩さんと「ちがう」ということを、「なぜなのだろう」とずっと考えていました。

もっとそのあたりを一歩さんから聞いてみたいと思いますが、前回とりあげた在日外国人の問題や部落問題にしても、同じマイノリティ性をもって生きている家族がいるんです。でも、セクシュアルマイノリティの人は家族のなかにも同じマイノリティ性をもって生きている人がいる可能性が極めて低いんです。ですから、ものすごく孤独です。そこが大きいのではないのかと思います。そうなったときに、じゃあ、「だれが支えられるのか？」というと、当事者にとって家族がいちばんハードルが高いかもしれませんね。そのときに、まわりにいるおとなとか社会がどう支えていけるのかというのは、すごく問われます。保育士としてなにができるのかを今一度、考えてもらえたらと思います。

